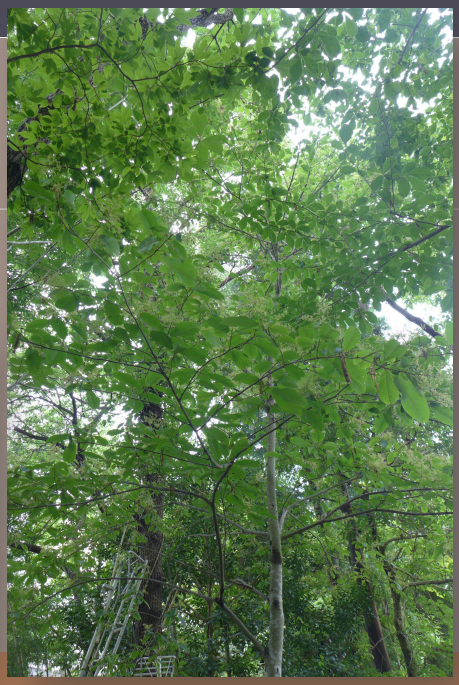
独立行政法人 国立病院機構
四国こどもとおとなの医療センター

アートプロジェクト

ー今月のショットー

金比羅さんの裾野にある守家邸の森



2015年　6月号

ー院内の小さな声からー

守家さんのお通夜は厳かに静かに営まれました。祭壇の前には立派な榊の枝が飾られ、そこに参列者が、真っ白い玉串をかけてゆきます。神道の形式のお通夜に参列したのは生まれて初めてでしたが、その瑞々しい榊に包まれたシンプルな儀式は緑の大好きな守家さんにぴったりだと思いました。守家さんは緑の中に還ったのだと感じ、手を合わせました。守家さんの奥様から、自宅にある樹を当院に寄付したいと申し出があったのは葬儀の後しばらく経ってからでした。院長に伝えると、庭に対する守家さんの御遺志を引き継いでありがたくお受けするように。とのことでした。現在、当院の施設管理担当者と造園会社さん、奥様と一緒にどの樹をどこに移植するか話し合っている最中です。ご自宅の広々とした庭を奥様が案内してくださったのですが、7、8メートルもある大きな樹から、小さな白い花を付ける低木まで、一本一本に物語があり、そのことを奥様が全て覚えておられ、また私たちに伝えようと一生懸命に話される様子に、お二人の時間が樹々の成長と同じように大切に紡がれて来た事を感じました。いつか守家さんと奥様の森が病院の庭園で患者さんに四季の変化を届けてくれることでしょう。その日まで精一杯お手伝いをさせていただきたいと思っています。

樹木医守家さん

香川小児病院と善通寺病院が統合の建設工事をしていた3年前、小児病院のロータリーにあったソテツと、善通寺病院の入り口にあったヒマラヤ杉の数本を新病院の庭園に移植する案が浮上しました。どちらも開院当初から植えられている古い樹で、病院と共に歴史を経験して来た大切な樹です。何もかも新しくなってしまう新病院だからこそ、生きて歴史を物語ってくれる存在がどうしても必要だと感じていました。しかし、地中深くまでしっかりと張った根は太く、そもそも移植が可能なのかどうか誰にもわかりませんでした。そんなとき樹木医の守家さんと出会いました。守家さんは樹を見て、その太い幹をなでながら「大丈夫や、ゆっくり順番に計画してやれば。」と、まるで樹と会話したかのようにニコニコしながら移植のアドバイザーを引き受けてくださったのです。心の底から頼もしく、嬉しかった事を昨日の事のように覚えています。それから守家さんは度々病院を訪れ、時期を見て造園会社さんに的確に指示し、大切に掘上げ、丁寧に移植し、どちらの樹も新しい庭園に立派に根付きました。守家さんは病院の庭園について、「開院と同時にあわてて完成させない方がいいよ。そこからゆっくりじっくり育てた方がいい。多様な植物を植えた方がおもしろいし、患者さんが散歩した時に季節の変化が感じられるといいなあ。」とまるで未来をすぐそこに見ているようなキラキラした目で話してくださいました。開院後はアドバイスをいただきながら順番に木や植物を植えてゆく予定でした。そんな守家さんの突然の訃報を聞いたとき、すぐには信じられなくてしばらくぼおっと夜空を眺めていたことを思い出します。今、庭園は芝生が茂り、雑草が伸びています。来週は看護学校の学生が草取りを手伝ってくれます。まだまだ手入れが行き届きません。でも、守家さんなら言ってくれるかもしれません「あせらんでもええ。ゆっくりでええんや。」

作家：増田妃早子 「ラナンキュラス」